

天草市楠浦墜落の米軍機概要について（緒言報告）

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 高谷和生

1 墜落機体及び墜落機搭乗員

- 墜落機体：North American「P 51」Mustang
- 搭乗員：CHAELES. L. BURMAN中尉。楠浦村字実ヶ浦（さねがうら）共同墓地埋葬
- 所属部隊：調査中
- 機体番号：46-6335
- 墜落日：1945年8月14日午前11時頃
- 墜落地：熊本県天草郡楠浦村（現・天草市楠浦町：くすうら）大字舟津（ふなつ）海岸沖
POW研究会「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士 西部軍管区」より

2 P 51 マスタング ※写真1・2参照

P 51 マスタングは「第2次世界大戦中に開発された米軍戦闘機で、最も完成度の高い機種とされる。全長9.8メートル、全幅11.3メートルのコンパクトな機体に、離昇出力1490馬力のパッカード・マーリン液冷V型12気筒エンジンを搭載、最大で時速703キロというレシプロエンジンでは極限のスピードを実現した。空気抵抗の小さい層流翼を採用、空力的に洗練されたボディで、さほどパワーの大きくないエンジンにもかかわらず、高速と強い上昇力、さらに最大3700キロという長い航続距離を実現した。戦略爆撃機の長距離護衛からロケット弾を搭載した地上攻撃まで幅広い任務をこなし、各型合計でおよそ1万4800機が生産された」

「時事通信社の米空軍提供」より
 沖縄移駐の陸軍部隊に装備された機体はD型機で、これは高高度性能向上のためロールスロイス社V-1650-7エンジンに転換したもので、併せて課題となっていた後方視界について、コックピット後部胴体を低くし、新たにホーカータイプーンで採用されていた**枠の無い水滴型キャノピー（バブルキャノピー）**を取りつけた機体である。また装備は12.7 mm機関銃を増設し、計6丁の機関銃を主翼に装備していた。また対地攻撃用HVARロケット弾も翼下に装備する。



写真1 欧州戦線のP 51 D型機 写真2 フィリピン諸島での英連邦軍機・P 51 D型機

3 第5戦闘機集団の第35戦闘機群団・第348戦闘機群団の概要

米軍が沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から米軍側は旧日本軍基地を整備し、6月には本格的に米陸軍極東航空軍が移駐を開始した。

極東航空軍は、第5・7航空軍から成り、所有する戦闘機のタイプ別（P 38・P 47・P 51）に8個軍団を構成していた。1945年8月1日段階での、**該当するP 51を装備するのは第5航空軍の第5戦闘機集団第35・348戦闘機群団**で、編成は工藤洋三氏作成の第1表の通りである。

各部隊の当日の作戦用務・該当部隊を調査中である。

表1 第5航空軍の編成 1945年8月1日段階
工藤洋三氏作成

| 所属部隊 | 機種 | 基地 |
|-----------|-------------|-------------------|
| 第43爆撃機群団 | 第63戦隊 | 重 B-24 伊江島 |
| | 第64戦隊 | |
| | 第65戦隊 | |
| 第5爆撃機集団 | 第403戦隊 | 中 B-25 沖縄 |
| | 第71戦隊 | |
| | 第405戦隊 | |
| | 第822戦隊 | |
| | 第823戦隊 | |
| 第345爆撃機群団 | 第498戦隊 | 中 B-25 伊江島 |
| | 第499戦隊 | |
| | 第500戦隊 | |
| 第3爆撃機群団 | 第501戦隊 | 軽 A-26 A-20 沖縄 |
| | 第8戦隊 | |
| 第8戦闘機群団 | 第13戦隊 | P-38 伊江島 |
| | 第89戦隊 | |
| | 第90戦隊 | |
| | 第35戦隊 | |
| | 第36戦隊 | |
| 第35戦闘機群団 | 第39戦隊 | P-51 沖縄 |
| | 第40戦隊 | |
| | 第41戦隊 | |
| | 第69戦隊 | |
| | 第99戦隊 | |
| 第58戦闘機群団 | 第310戦隊 | P-47 沖縄 |
| | 第311戦隊 | |
| | 第340戦隊 | |
| | 第341戦隊 | |
| 第348戦闘機群団 | 第342戦隊 | P-51 伊江島 |
| | 第343戦隊 | |
| | 第344戦隊 | |
| | 第480戦隊 | |
| 夜間戦闘機 | 第418夜間戦闘機戦隊 | P-61 嘉手納 |
| 夜間戦闘機 | 第421夜間戦闘機戦隊 | P-61 伊江島 |
| 写真 | 第6偵察群団 | F-5 F-7 沖縄 |
| 偵察 | 第71偵察群団 | B-25 伊江島 |

4 墜落地点及び埋葬された米兵、米機の状況 ～天草市楠浦町舟津海岸沖の五色島地先に墜落～

(1) 証言1

□澤田道興さん：宗心寺住職・天草市楠浦町

- 亡くなった先代住職「澤田道貞」師よりの伝聞である。「米軍機の遺体は、蛭子の浜（えびすのはま）海岸にあげ、その後村の縁故者のいない者対象の共同墓地・向山（むこうやま）実ヶ浦（さんねがうら）に埋葬した」「翌々年、進駐軍将兵3人が訪れた際には、仏式の回向の儀式として、埋葬地を結界し蝋燭や香花をたむけお経をあげると米兵は感動した」「米兵は当初シャベルで掘ったが、遺体が傷つかないようにほとんど素手で丁寧にあつかった」
- 向山のほぼ山頂近くの実ヶ浦共同墓地は、訪れる者もなく、場所もはっきりしない。



写真3 証言された澤田道興さんと宗心寺楼門

写真4 共同墓地のあった向山 ※山頂付近のくびれた場所付近に墓地所在

(2) 証言2

□平嶋夏男さん：元楠浦公民館長・本渡楠浦町

- 墜落機を目撃した「舟津集落（墜落機はこの集落と五色島の中の遠浅の海に墜落・水没）」の「故大平トミ子さん」によれば「佐伊津（さいつ・天草市本渡・墜落地点まで約6 km）の天草海軍航空隊からの高射砲か、志柿港（しがき・天草市志柿・墜落地点まで約5 km）に停泊していた艦船の機関銃に撃たれて、瀬戸海峡（上島と下島の間）の間をふらふらして落ちてきた」「機体は北から飛んできて、五色島の直ぐ手前の海に落ちた」「墜落時の衝撃でクルッと回り、機首が北東方向を向いた」「煙は吐いていなかった」との事です。
- 平嶋さんの小学生時代に「機体は、五色島の直ぐそばにあり、満潮時には機体操縦席が頭を出していた」という。ただいつの間にか機体は無くなった。



写真5 証言者の平嶋夏男さん

写真6 向山の実ヶ浦共同墓地の方向を示す平嶋さん

写真7 五色島の全景 ※墜落地点は島左側地先の沖合

(4) 墜落機資料

- 墜落地点に隣接した共有管理地「五色島（こしきじま）」の松の木に、墜落機破片が突き刺さり、その後この資料を楠浦コミュニティセンター（旧楠浦公民館）で保管されている。
- 金属片は「リベット留めジュラルミン製部材片」で、約10cm方形。表面には焼け焦げた跡やめくれ破砕した状態が見え、墜落時の衝撃の激しさを感じさせる。部材は平面状で、端部形状も確認できるが、機体部位の特定には結びつかない。
- 本資料を公民館に寄贈した方及び経緯を調査中である。



写真 8・9・10 五色島の松に刺さった墜落機ジュラルミン片

5 まとめ

当時の天草下島には「独立混成第百二十六旅団」が戦時編制され、本土決戦部隊として駐留している。この通称「天草兵団・敬忠部隊」は、臨時編制の応招部隊で、歩兵は7個大隊、砲兵は一大隊の編制で本部を本渡「明德寺」においていた。装備砲も数門しかなかったとのことで貧弱で、対空火器を装備していたか不明である。

これまでの証言では地元の「軍施設（天草海軍航空隊基地）や造船所（付近には木造船の造船所の熊本造船所）を狙った攻撃中」に、応戦されての墜落なのか、もしくは「爆撃機護衛での沖縄帰還時での機体不調による低空飛行」での墜落なのかが判明しない。

このあと8/14の地元攻撃の記録・証言があるのかを確認が必要である。

この時期（8/10の第2回熊本大空襲）では、熊本県内の組織的な空襲攻撃は、一端止まり、久留米・鳥栖方面空襲が激化しているので、「沖縄出撃爆撃機護衛での機体不調」による低空飛行時に、更に対空射撃を受けての墜落とも想定される。

現在関係する米軍第108基地部隊の記録等の調査を進めている。

- 参考資料 ①楠浦町誌編集委員会『楠浦町誌』2013年 楠浦町公民館
 ②高谷和生『くまもとの戦争遺産』2020年 熊日出版
 ③POW研究会「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士 西部軍管区」HP掲載



— 連絡先 —
 □くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
 個人携帯 090-1513-5528
 Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
 HP URL https://www.kumamoto-senseki.net/

